**取組実績の概要**　【２ページ以内】

**１．交流プログラムの実施状況**

本プログラムは、「人の移動と共生における調和と人間の尊厳を追求する課題解決型の教育交流プログラム」（Sophia-Nanzan Latin America Program、以下LAP）として、中南米諸国との学生交流の促進にとどまらず、自らの専門に立脚しつつ、高まる多様性、顕在化する地球規模の課題を認識し、その解決に貢献できる人材の育成に繋がる国際高等教育連携交流モデルを確立することを目的として実施した。

**（１）受入プログラム**

国内3大学の教育プログラムの強みを組み合わせ、更に企業や日系人コミュニティでの学外研修を組み込み、多角的な視野で問題の解決に向けて協働する力を養うマルチキャンパスの教育交流プログラムを構築した。5年間で全受入学生116人のうち81人がこの枠組を選択した。このマルチキャンパス学修プログラムの特長は、人の移動と共生が引き起こす課題の発見と解決に向けて考える機会を幾層にも重ねる構成となっている点である。具体的には、受入学生はまず、南山大学において約4週間の日本語集中コースに参加し、日系人学校や中南米で事業を展開する企業でのインターンシップに参加した。その後、上智大学へ移動し、自身の専門分野を英語で学修するとともに、特設科目「日本・ラテンアメリカ比較演習（以下、日・ラ米比較演習）」、「人の移動と共生」いずれかを履修した（南山大学に直接留学した学生は、相当する「ラテンアメリカ特殊研究B」を履修）。上智大学在学中は、東京近郊の企業でのインターンシップおよび上智短大の所在地である秦野市の日系人コミュニティへのサービスラーニング活動に参加した。

**（２）派遣プログラム**

受入学生とともに学ぶ選択必修科目「日・ラ米比較演習」、「人の移動と共生」と長期・短期の留学プログラムを組み合わせた多層的なプログラムを構築した。これらプログラム構築にあたっては、上智大学が2013年度世界展開力強化事業（AIMSプログラム）に採択された「Sophia AIMSプログラム」での経験を活用した。その具体例が、専門科目と学生交流の継続性と、学融合型教育モデルの導入である。スペイン語またはポルトガル語で開講した「日・ラ米比較演習」では、中南米と日本の学生が両地域の社会、経済、教育、文学をテーマに比較研究を行う中で学生間の交流も深まり、留学後も現地の交流が続いた。また、英語で開講した「人の移動と共生」では、両地域の学生に加えて、東南アジアなど他地域からの受入学生も参加し、上智大学をハブとして多様な学生がそれぞれの文化背景に立脚した視点でディスカッションを行う、主体的な参加型・課題発見型授業となった。

また、派遣学生は、受入学生向けのインターンシップにも同行し、日本と中南米の社会的・経済的な繋がりについて気づきを得て、留学先での学修の土台のひとつとした。留学中は授業履修や現地学生との交流に加え、日本語教育機関や国際協力機構（JICA）現地事務所での2週間～1学期間の就業体験型インターンシップや日本企業の現地法人での訪問型インターンシップに参加し、大学の学びと実践的学修を結びつけることで多層的・多角的な考察力を得た。

**（３）国内連携大学が合同派遣した短期派遣プログラム**

教皇庁立ハベリアーナ大学（コロンビア）の短期スペイン語集中コース（上智・南山）に参加した学生が、大学のプログラムと教職員宅でのホームステイの経験から、高度なスペイン語運用能力を身につけただけでなく、コロンビア社会への理解も深めた。また、「往還する南米日系人」をテーマとした「ペルー・スタディツアー」（上智・南山・上智短大）は、上智短大と秦野市日系人コミュニティとの連携を活かした事前研修と現地での研修を組み合わせ、日本と中南米間での人の移動と共生の実際に触れ、調和と人間の尊厳の追求のあり方を多面的に考える、LAPを体現するプログラムとなった。短期派遣プログラムには、累計で145人の学生が参加した。

**２．プログラムの質保証、関係機関とのネットワーキング**

プログラム運営にかかる重要事項を決定する機関として、事業責任者を委員長とする「プログラム運営協議会」を設置し、国内連携3校の緊密な連携の下で事業を遂行した。上智大学、南山大学では常勤職員各1名を配置し、3校の専任職員と共にLAP運営業務を実施する体制を整備した。加えて、南山大学で採用した特任講師は日本語集中コースを担当し、上智大学への橋渡しを念頭に置いた中南米学生向け教材と学修支援体制を確立した。派遣学生の留学計画は当該学生の所属学科教員が助言・指導を行った。

中南米連携大学とは、毎年「プログラム開発協議会」を実施し、各大学の訪問・来訪やNAFSA等国際会議の場を活用し、事業運営について協議した。特に、事業開始年度のキックオフシンポジウム、中間年度のスタッフミーティング、最終年度の総括シンポジウム開催時には、中南米と日本の主要連携大学が一堂に会する機会を設け、連携基盤を構築した。キックオフシンポジウムと総括シンポジウムでは、米州開発銀行等協力企業・機関の関係者も参加し、初年度は広く本事業への理解と協力を呼びかけ、最終年度は事業の振り返りと今後の自走化について助言を得た。

さらに外部有識者による定期的な評価と助言を得るため、高等教育の質保証や国際機関・民間企業で中南米に関わる専門家が参加する「国際協働教育評価協力者会議」を2年目より毎年度開催した。産官学の外部有識者と共に事業を客観的に評価し、今後の改善と継続的発展に繋げた。

加えて、「インターンシップ協議会」を開催し、受入協力機関の担当者とともに、実施報告を踏まえ次年度以降のプログラムのあり方を協議した。本事業のインターンシップは、国内の中南米に関連する企業・機関や現地の日系企業・機関と連携して行い、受入・派遣学生に提供した。国内では、派遣前後の日本人学生と受入留学生がともにインターンシップに参加し、中南米と日本におけるビジネスや関係性の理解を深める共修型のインターンシップモデルを確立した。これにより、学生同士のコミュニティ形成とキャリア理解を連動させることが可能となった。さらに、現地インターンシップでは、企業訪問型だけでなく、長期で実際の業務に携わる就業体験型の機会を提供した。現地では、上智・南山の学生がともに参加できる連携体制を整備した。中南米の現地で働くことを具体的にイメージでき、強い動機づけがなされるため、学生の本プログラム参加への後押しとなった。最終年度の「インターンシップ協議会」では、受入機関から今後の継続的な取組の要望があり、高い評価を得るものとなった。

### ３．学生モビリティと環境整備

中南米連携13大学すべてと学生交流を展開し、累計217人の学生の派遣、116人の学生の受入を達成した。南山大学では、上智大学の交換留学協定校とも連携が促進され、当初、連携を計画していた4校を大幅に上回る9校との協定締結を実現し、キャンパスの多様化に大きく貢献した。英語科単科である上智短大では、これまで英語圏以外への海外派遣プログラムがなかったが、ペルー・スタディツアーに学生を派遣することで英語圏以外の価値観に触れ、学生がより多角的な視野を得ることに繋がった。長期派遣学生は、半年ないし1年間現地に滞在することで、語学力をB2レベル以上に向上させただけでなく、中南米に対する知識や理解をより深め、その地域の人々との間に確かな信頼関係を築く経験を通じて、多様性を理解し様々な文化的背景を持った人々と共生する力を涵養することができた。

受入学生のための環境整備としては、大学所有の「祖師谷国際交流会館（上智）」「南山学園研修センターまたはホームステイ（南山）」の宿舎費支援を行い、日本人学生や地域住民との交流を深めた。派遣学生には渡航費の一部を支援した。また、渡航前危機管理ガイダンスや、常勤職員による現地情報提供および学科教員による個別の面談を通じて留学や学修計画を支援する体制を整えた。補助事業期間終了後は、上智大学では大学独自の奨学金制度を設立し、AIMSプログラムを含む世界展開力継承事業への受入学生に対する生活援助費と派遣学生に対する渡航支援金の給付制度を整えた。南山大学でも、本事業連携校などの重点校への派遣学生に対して優先的に派遣留学奨学金を割り当てる制度見直しを検討している。

**【本事業における交流学生数の計画と実績】**

（単位：人）

| | 2015年度 | | 2016年度 | | 2017年度 | | 2018年度 | | 2019年度 | | 合　計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 |
| 計画※ | 15 | 4 | 42 | 19 | 48 | 25 | 53 | 26 | 58 | 26 | 216 | 100 |
| 実績 | 15 | 4 | 37 | 22 | 53 | 26 | 51 | 29 | 61 | 35 | 217 | 116 |

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

**特筆すべき成果（グッドプラクティス）**【１ページ以内】

**〇国内連携3校による国際協働教育プログラムの確立と補助事業期間終了後の継続**

上智大学および南山大学、上智短大のいずれも、国内他大学と連携した国際高等教育プログラムの実施は初めての経験だった。異なる教育・研究基盤があり地理的にも離れた3校が、共同事業に取り組むことは大きな挑戦であった。しかし、テレビ会議や直接の面会を重ね、相互の背景を理解し合い、経験を持ち寄り、共に課題への対応を考えるうちに、教職員の間でも学び合う協働力が作用して連携体制が築かれていったが、このことが、上智の英語での専門科目、南山の日本語教育、上智短大のサービスラーニング活動という、3校が各分野で持つ強みを融合させたマルチキャンパス学修モデルの構築に繋がった。上智短大のサービスラーニング活動で培った秦野市日系人コミュニティとの連携は、国内連携3校合同で学生を派遣した「ペルー・スタディツアー」の事前研修で活かされ、学びの土台となる役割を果たした。

また、教皇庁立ハベリアーナ大学短期スペイン語コースは、毎年参加者から翌年の長期留学に挑戦する学生がおり（2016年度2人、17年度3人、18年度2人、19年度1人）、短期留学が長期留学の後押しとなった。上智では本コースを継続開講し、留学の好循環を促進する。南山でも継続開講を検討している。上智・南山で特設科目として開講した、スペイン語またはポルトガル語で交換留学生と正規学生が共修する「日・ラ米比較演習」（上智）「ラテンアメリカ特殊研究B」（南山）は両大学で開講を続け、両地域の学生が学修面・文化面での交流を深めるプラットフォームとしての役割を継続する。

**〇本事業での成果を活用した新規プログラムの誕生**

3校は、本事業を通じて築いた強固な連携体制のもと、本プログラムを補助事業期間終了後も持続可能な形で自走化し新たな形で継続する。南山で提供した日本語集中コースは、上智の交換留学受入学生を対象に、8月にLate August Pre-sessional日本語集中コースとして、LAP以外の上智受入学生にも拡大して実施する。上智の受入学生は、上智短大のサービスラーニング活動に継続して受け入れる。

また、上智では、2013年度世界展開力(AIMS)に採択された「Sophia-AIMSプログラム」で構築した英語科目も継続しており、多様な学生が相互の授業履修に乗り入れ、多国間の学生が協働して学ぶ場が増えた。2020年度春学期はコロナ禍の影響でオンライン授業形式をとってきたが、「日・ラ米比較演習」継承科目でも正規生とLAP受入学生がオンラインでもディスカッションを取り入れ、交流の質を担保した。上智・南山とも2019年度世界展開力（COIL型教育）にもそれぞれ採択され、COILの経験を蓄積している。COIL型教育で得られた知見をLAP継承事業にも活かしていく。

（2018年度日本語集中ｺｰｽ）（2018年度ﾊﾞﾘｱｰﾅ大学短期ｽﾍﾟｲﾝ語集中ｺｰｽ）（2019年12月6日　総括ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ）

**〇中南米地域との交流の拡大**

上智は、中南米連携13大学全てと学生交流を実現した。南山は、事業開始前は中南米の協定校は教皇庁立ペルー・カトリック大学とメキシコ自治工科大学の2校のみであったが、グアナフアト大学、ロスアンデス大学の2校を加え、計画通り4校と交流を開始した。さらに、マルチキャンパスで日本語集中コースでの上智学生の受入実績が重なるうちに、中南米連携校とも信頼関係が構築され、新たに計画にはなかった教皇庁立ハベリアーナ大学、コルドバ・カトリック大学、エル・サルバドール大学、チリ・カトリック大学、ブラジリア大学とも協定を締結し、国内大学の国際化を相互に促進した好事例となった。中南米連携校にとっても、定期的に関係者が一堂に会することが、中南米地域間の交流促進のきっかけとなった。受入学生も、日本語集中コースで約4週間生活と授業を共にしたことで、これまで留学先と自国の間に留まることが多かった学生交流に中南米の横の繋がりが生まれ、留学終了後も交流が続いている。学生交流の深化に伴い、研究交流も更に活性化した。上智では、地球環境学研究科にて教皇庁立ハベリアーナ大学との研究交流が開始し、さくらサイエンスプランやJICA草の根事業を活用した交流が展開されている。また、教員交換協定が効果的に活用され、2019年度1人の教員を3か月間受け入れ、この教員は授業にも参加した。